



CFFマレーシア応援団 メールマガジン

トゥ | リ | マ | カ | 通 | 信 season3

2012年4月5日 ~ 7月25日

----- 目 次 -----

	ページ
Satu (1) 「愛しやすい人、愛しにくい人」 2012春インターン 青木 俊介 ---	2
Dua(2) 「子どもと一緒に子どもの家でのキャンプ」 マレーシア第18回キャンプキャンパー 太田 浩司 ---	5
Tiga(3) 「未来の基盤を創ること」 CFFジャパン理事・ソーシャルワーカー 大矢 裕子 ---	8
Empat(4) 「ワークキャンプを終えて」 マレーシア第18回キャンプキャンパー 吉川 菜美 ---	10
Lima (5) 「忘れてはいけないこと」 マレーシア第19回キャンプキャンパー 升田 成美 ---	12
Enam(6) 「マレーシアの子ども達」 CFFマレーシア 安部 光彦 ---	14
Tujuh (7) 「CFFマレーシアとの関わり」 CFF会員 土屋 弘道 ---	16
Lapan (8) 「子どもの日常から ー子どもたちの夢ー」 CFFマレーシア 安部 かおり ---	18
Sembilan (9) 「Gingga(ジンガ、日本名ユタカ)18歳を、 安部さんよりちょっぴりご紹介」 ---	20
Sepuluh (10) 「ともに生きてるよろこび」 NPO法人CFFジャパン 渡辺 正幸 ---	22
Sebelas (11) バスが子どもの家にやってきました！ マレーシア応援団 木村万里子 ---	25

編集：CFFマレーシア応援団 支援者フォローチーム

(担当：槌屋 奈生子(なお), 木村 万里子(キム), 齋藤 慎也(さいしん))

(協力：ゆい(M5), みき, ゆい(M9), あきら(M17), なっしー(事務局), まさ(事務局))

愛しやすい人、愛しにくい人

2012春インターン 青木 俊介 (しゅん)

この春、CFFマレーシアでインターンをしていた青木俊介(しゅん)です。



「子どもの家」の子ども達は元気にすくすくと育っています。
私が訪れて少しした頃、「My houseで一緒に寝よう！」と子どもたちが誘ってくれました。子ども達がこの地に来てからまだ時間は浅いけど、きっと彼らの中では「自分たちの家」だと思っているんだなあ、と考えると嬉しくなりました。

子どもたちは毎日学校から帰ってくると、CFFマレーシアの土地を走り回っています。時にはセパタクローをし、時には凧あげをし、時にはケンカをし、時には叱られ…



普段スタッフの仕事やキャンプで使う一輪車も子ども達にかかれば遊び道具に…

素敵な、屈託のない笑顔を持ち、一見愛されやすい子ども達。

けれど彼らの人生には様々なバックグラウンドがあり、決して「愛されやすい人」とはいえないかもしれません。

時には私たちが理解できないイタズラや意地悪もしてしまう。



彼らが「愛しやすい人」、「愛されにくい人」のどちらであるかはわからない。
それでも確かに言えることは、愛されるために生まれてきた。そう強く感じました。

そして今、このCFFマレーシアでたくさんの愛を受けて育っている。
彼らが、そしてより多くの子どもがこの地で愛されて育っていくことを祈っています。

子どもと一緒に子どもの家でのキャンプ

マレーシア第18回キャンプキャンパー 太田浩司

今回のキャンプは、「子どもの家」に子どもが入って初めてのキャンプでした。マレーシア第18回（以後M18と省略）のキャンプに彼らの存在は、とても大きなものでした。自分自身、あの子どもたちのことは本当の弟だと思っています。そしてこの子達はCFFの未来です。



M18のキャンプでは、子どもたちの生活のために魚を養殖する池を作りました。毎日みんなド口だらけになりながら、疲れているのにみんな笑顔、声を掛け合いながら、ときには歌を唄い取り組むことが出来ました。それも子どもたちの存在のおかげです。自分たちが作っている池が、子どもたちのためになるという意識があったので、辛いワークも辛くなくなりやり遂げることが出来ました。

毎日の夜のシェアの時間は、日本で普通に生活していたら考えないことをテーマに考え、みんなでそれについてシェアしました。このシェアの時間で自分が感じたことは、このキャンプが楽しいだけではないということです。

時には考えることが苦しく、考えることをやめてしまおうとすること、みんなの目を気にして 自分の本当の考えをシェアすることをためらうこともありました。しかしM18のメンバーみんなが、苦しい中自分の考えをシェアしている姿を見て、自分も今まで心の奥底にしまっておいた辛い過去をシェアすることが出来ました。現地ディレクターが、自分にシェアするとは、話す、放す、離すことによって心が恐怖から開放され、愛と優しさに満ちると教えてくれ、自分もあのシェアの時間と仲間たちがいたから 人の目を気にして怖がっていた自分を、変えることが出来たんだと思います。



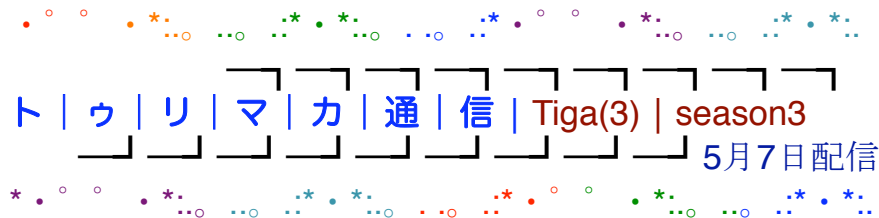
バンブーハウスで生活した時間は、ワークやシェアはもちろん、みんなで一緒に「いただきます！」と言ってから食べたご飯は1人で食べるご飯の100倍おいしく、みんなで見た青空、夕日、星空はとてもきれいでした。周りの大自然は小さいことを気にしない、大きな心をくれました。この素晴らしい土地で共に過ごすことが出来た、バンブーハウスで出会ったM18のキャンパー、CFFマレーシア現地スタッフ、そして4人の子どもたちは、自分の家族です。

これから、自分はバンブーハウスでの経験を多くの学生に伝え、一人でも多くの人がバンブーハウスに行ってくれるよう活動していくつもりです。一生の財産になる経験、人との出会い、目に見える人との繋がり、目には見えないけれどバンブーハウスにある、人との繋がりを多くの人に感じてほしいです。

そして自分もバンブーハウスの家族に会いに、また新たな素晴らしい出会いを求め

あの土地に帰りたいと思っています。





未来の基盤を創ること

C F F ジャパン理事・ソーシャルワーカー 大矢 裕子
(第14回CFFフィリピン・ワークキャンプ参加、
同第27回リーダー、第3期インターン)

はじめまして。私は現在日本の児童福祉施設で働いています。今の仕事に通じるきっかけがC F Fとの出会いでした。

第14回CFFフィリピン・ワークキャンプ（2001年8月）の開始は、初めてCFFフィリピン「子どもの家」に子どもが入所した直後でした。

マニラのホテルで、子どもが2人（10歳女兒、14歳男児）入所したと報告がありました。子どもたちは、実年齢よりはるかに小さい印象でした。偶然にもキャンプには同年齢の日本人が参加していたので、男の子は始めてみる日本人にも興味津々で、すぐに打ち解けてくれました。女の子はまだ生活にもなれず、スタッフも彼女に対してどのように接してよいのかわからない様子で、一日中テレビの前で横たわっている印象でした。

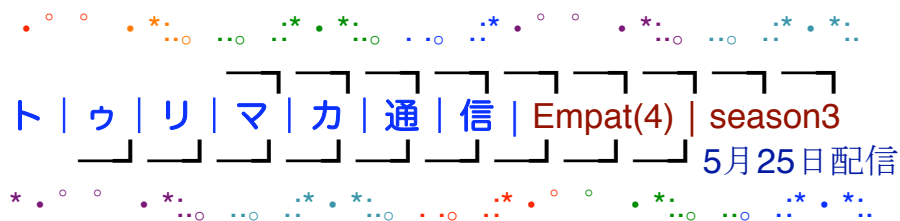
9ヶ月後、再びインターンとして「子どもの家」に戻るとそこには7人の子どもがいました。あのときの女の子も成長し、小さい子の面倒をよくみていました。その後女の子は家庭に戻り、CFFフィリピンの理事の支援の下、大学に通っています。去年（2011年8月）再び訪れたとき、彼女の家を訪ねました。すっかり大人の女性になった彼女に年齢を聞くと、私が始めて彼女に出会った年齢になっていたのです。

私はまだC F F マレーシアには行ったことがありません。ただいえることは10年という歳月で沢山の子どもたち、家族そして、青年たちの未来が創られたということです。

C F Fは未来の基盤を創る団体です。ぜひ私たちと一緒に沢山の子どもたちの未来の基盤を創って行きましょう！！



写真は2005年に日本人有志により寄付されたジープニー
(子どもの家にジープニーを贈ろうキャンペーン)。
現在子ども達の学校の送迎に利用しています。



第18回 CFF マレーシア・ワークキャンプ キャンパー 吉川菜美

こんにちは。第18回CFFマレーシア・ワークキャンプ（以下、M18）参加者のなみです。今日は、私のマレーシアワークキャンプを終えての感想を書きたいと思います。「こどもの家」のことからは離れてしましますが・・・

早いようであっという間だったマレーシアでの12日間は、すべてが私にとって新鮮でした。特に、豊かな自然に囲まれ、時間がゆっくり流れていくバンブーハウスでの日々は、生きることの素晴らしさを感じさせてくれました。晴れただけで、「ワークができる！」と、みんなで喜んだり、一生懸命働いたワークの後のご飯がとても美味しかったり。日本では当たり前感じていたことが、とても幸せなことに感じられて、それは今でも残っています。何でもない毎日の中でも小さなことに喜びを発見できるようになり、大げさかもしれませんが、人生が楽しくなりました。



また、みんなが「一緒に生きている」ということを感じました。国籍や環境が違って、同じ歌を笑って歌って、同じご飯をおいしいねって言いながら食べて・・・

何にも特別なことじゃないみたいだけれど、この「一緒に生きている」ということが私の中での大きな気づきです。

バンブーハウスでは、様々な内容についてシェアしました。ローカルキャンパーも交えて、笑ったり苦しんだり、涙を流したり。みんながみんなの思いを真剣に聞いて受け止めて、毎晩そのことを繰り返すうちに、一人じゃないということを強く感じるようになりました。

日本では、他人との関係が薄くなってしまって、自分は一人だと思ってしまうこともありました。だから、他の人に対しても自分は何も役に立てないと思っていました。でも、自分が言った一言で誰かが笑ってくれることがある。ただ寄り添って話を聞くことはできると、私は決して無力ではないということをみんなからおしえてもらいました。

また、世界にある解決できないような理不尽な現実についても考え続けていきたいです。「一緒に生きていきたい」から。考えていく中で、自分にできる小さなこと、周りのだれかを笑顔にしたり、自分の身近なものから大切にしようという気持ちも芽生えます。

遠い国の生活環境も違う人と「一緒に生きよう」と考えることは、全然関係ないことなんかじゃなくて、すべて自分の大切なものや自分自身につながっていると思いました。

これからも、考え続けていくことをやめないで、自分が出来ること、自分にしかできないことを探しながら「一緒に生きていきたい」と思います。



忘れてはいけないこと

マレーシア・19回ワークキャンプ参加 升田 成美（まっすー）

マレーシア・ワークキャンプ19回に参加した、升田成美（まっすー）です。
私がこのブログを書いて良いのでしょうか…。いや、自信を持って心にあるがまを書きたいと思います！

個性豊かで何度もぶつかり合ったけど大好きな、m19回の日本人・現地人キャンパー、スタッフの方々、そして4人の子も達。この人達と共に過ごした12日間は私の永遠の宝物であり、語っても語りきれないもの。



ワーク最終日の写真。私達は養殖用の池を作りました。

子ども達。私達がワークをしている最中、午後学校組の2人の子もは車で学校へ向かいます。学校で少しずつ英語を習っているようで、学校に行く時、「I miss you!」「I love you!」など、笑顔で話しかけてくれます。子ども達はバドミントンが大好き。それから鬼ごっこも。思い返すといつも走り回っていた気が…。最年長の子はギターがとても上手！

子ども達の笑顔は、私達を笑顔にしてくれます。この笑顔を守り続けたい。

私は子どものいない「子どもの家」を見ていません。キャンプ終盤、ディレクターより第1回～18回のキャンパーが創り上げてきてくれたものの説明を受けながら、「子どもの家」の敷地内を歩き回りました。私が来た時には既にバンブーハウスがあり、道があり、橋があり、電気まで通っており…子ども達がいました。これまで、本当に多くの方々が強い願いを込めて関わってきて、ようやく4人の子ども達をCFFマレーシアに受け入れる事ができた。この事を決して忘れてはいけない、と心から思いました。

私達は最終日にパイナップル植えを行い、丘の上から「子どもの家」を見ました。その時、“未来”という言葉が自然と心に浮かび上がってきました。子どもは愛されるべきです。世の中には、どうしようもない事もあるかもしれない。だけど、どうしようもないの一言では終わらせたくない。自分にも何かできる事が必ずある。まずは伝える事から。そう思うと、エネルギーが湧いてきました。

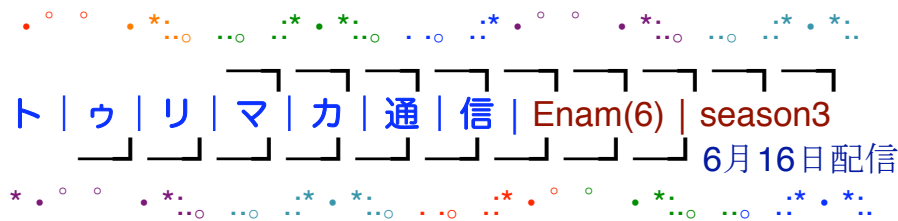


「人って、こんなにも温かいんだ。」

と、改めて実感する事ができたキャンプ。本当に、本当に行って良かった。これからも楽しく、時には葛藤を繰り返しながらも、頑張っていきます。

すべての出会いに感謝。

また、みんなで「believe」歌いたいな。



マレーシアの子ども達

C F F マレーシア 安部光彦

子供たちは昨年12月に入所してから半年が経ちました。

4人ともあまりの元気さに私たちスタッフは毎日てんてこまいです。

片づけ、勉強、いったいどうすればできるようになるのか、未だに良い方法がみつかりません。

それらに追われる毎日でもあります、実はそれらよりも何倍も大切にしているC F F マレーシア3か条があります。

それは

1. けんかをしたらお互い謝ること
2. 謝った後は赦しあうこと
3. 年上は年下をかわいがり、年下は年上を敬うこと

全部をまとめて一言でいうと、愛し合うことということになるでしょうか。

ありふれた言葉かもしれませんが、これが生活をしていくうえで、教育やしつけよりももっと大事なものです。

けんか、いざこざは子供にとっては仕事のようなもので、尽きません。

人間だから違いがあり、違いがあるからお互いの間にストレスが生じます。

それは子どもの世界も同じで、成長するためにも必要な経験ですが、その成長のカギは「ごめんなさい」が言えるかどうかにかかっています。

これ、簡単そうで難しいですね。

赦すことも簡単ではありません。

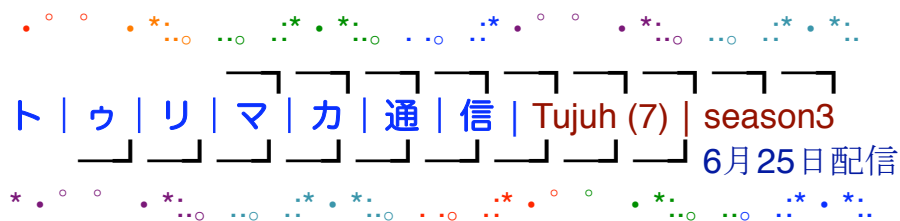
それからお互いを尊重することも。

子どもたちが喧嘩したときに、「お互いに謝る」ということを「スタッフとして」或いは「大人として」させながら「自分たちはそれができているだろうか」ということを思わされます。

子供を預かり育てるということは、自らの生き方を問われていることでもあるのです。

そんな意味で、本当に子どもたちとの生活がここで始まったんだなあ、と実感するこの頃です。





CFFマレーシアとの関わり

CFF会員 土屋 弘道

CFFマレーシアにずっと昔から関係してきたCFF会員の土屋です。
5月7日配信の記事を楽しく読ませていただきました。

2001年に第14回フィリピンワークキャンプに参加した時に、「子どもの家」に始めて二人の子どもが入所したと書いてあります。今から11年前ですね。CFFマレーシア「子どもの家」の入所は、去年の12月で4人でした。フィリピンに比べてちょうど10年後となりました。

入所の開始は、実は3年から4年の準備期間があったこと、その裏で多くの人の願いがあったことを思うと考え深い物があります。

私のスタートは2007年9月に行われた第0回CFFマレーシアスタデーツアーでした。参加者は15名でしたが、見学、夜のシェア、またバスの中でまで、CFFマレーシアの理念はどうあるべきか熱い議論を交わし、大変思い出深い旅でした。



晴天のキナバル山を眺める

その後すぐに始まったワークキャンプで、日本人と現地の青年と力を合わせて、「子どもの家」の建設を進めてきたわけです。現地のNPO法人の設立が2008年4月ですから、入所まで3.5年かかりました。私たちは「未来の基盤を創るため」にかかわって来たことに誇りを持っています。そして、たとえ小さなことでも、いや、小さいことだからこそ、勇気をもってかかわって行きたいと思っています。10年後のCFFマレーシアがどうなっていくか実に楽しみに見守っていきたいと思います。

子どもの日常から ー子どもたちの夢ー

CFFマレーシア 安部かおり

今日は土曜日。子どもたちは学校が休みです。

「あれ？今日はなんて静かなんだろう。。。」「と思っていると、案の定、パパール町の教会の牧師に連れられてコタキナバルまで聖歌隊の練習に出かけていました。

CFFマレーシア内だけでなく新しい学校や地域にも受け入れられて、どこでもいじめを受けることなく元気いっぱいな彼ら。

入所して半年が経ちましたが、この間身長も伸びて、入所当時に比べると生活が随分落ち着いてきたように感じています。

先の春キャンプではたくさんの日本人青年との出会いもありました。

真剣にワークし、語り合っているお兄さんやお姉さんを見て彼らの世界はどんなにか広げられたことでしょう。

故郷や実の両親から離れてきつと寂しい思いをしているに違いはないのですが、その境遇に負けることなく、
たくさんの人の愛を受けて、人を信じ、強く生きる力を身につけ育ててほしいと、一緒に生活する中で強く思わされています。

確実に身体も心も成長している彼ら。それぞれにとても個性的です。



入口近くの川で水遊び

ある日の食卓で、3人の子どもと将来の夢の話で盛り上がりました。

子ども1;日本の大学に行きたいんだ。

私;ヘー、なんで?何を勉強するの?メカニック?

子ども1;うーん、よくわからないけど日本語かなあ。。。

子ども2;僕はお父さんが中国人だから、中国の大学に行きたいんだ。

子ども3;僕はKL(クアラルンプール)の大学。

私;ヘーそうなんだあ。それから何になりたいの?

子ども1;救急車の運転手。

私;ドライブするだけでなく患者さんの応急処置もするんでしょ。大事なお仕事だよ。

子ども2;カッコいい警察官。

私;いいねえ。喧嘩していたら止めるのでしょ?

子ども3;マディン牧師みたいな牧師になりたい。

私;マディン牧師が大好きなんだね。アンティ(私)も尊敬してる。

もちろん未熟で漠然とした夢の話なのですが、この3人の子どもは、多くの立派な大学生のお兄さんお姉さんが来てくれているからか大学に進学したいと言い、そして明らかに自分の身近な大人の職業を夢見ていることがわかります。

これからどのようにここマレーシアで成長していくのでしょうか。

きっと様々な大人の背中を見て育っていくと思うと、彼らの一番近くにいる私たちの責任は重いです。

子どもの夢を語る可愛らしい生き生きとした表情を見ながら一方で、数日前に学校からいただいた成績が頭をよぎり「はい!ごちそうさまをしたら、片づけして、9時まで勉強しよう!」

子どもたち;「え—————っ」と一気に会話が現実的になっておわりました。

彼らの成績を見ると、それぞれに得意な教科もなさそうなのでどうしたものか、とスタッフで知恵を絞っています。

しかしながら、彼らの夢に常に耳を傾けることを忘れず、それを励みとして共に生きて行きたい、と思うのです。



CFFマレーシア日常の1ページでした。

Gingga(ジンガ、日本名ユタカ)18歳を、 安部さんよりちょっぴりご紹介

彼はおしゃれと日本文化が好きな今時の若者です。

昨年2月からCFFマレーシアで働き始めた当初は朝も起きれず、昼ご飯を食べた後もずっと寝ていて、仕事も何をやらしてもできず大変な怠け者でしたが、最近は真面目に働くようになり、顔もりりしく、子どもたちにも一目置かれているようです。

今回の原稿では彼の、CFFで働くことの喜びだけでなく、故郷を離れて働くが故に揺れる青年の心が書かれています。

彼はお母さんのもとに帰ってあげたいけど、故郷に帰れば仕事はなく、もとの墮落した生活に戻ることを恐れ、今はそれができない、毎日のように電話がかかってくる母親に申し訳ないと泣いていました。

このような辛い思いをしながら若者は次第に自分の人生の意味を考え始め、成長していくのです。子どもたちでなく、若いスタッフにも自分の将来をしっかりと考え、立派に育ってほしいと願ってやみません。

ジンガの今の想い

Gingga Anak Inen(ジンガ)



僕はCFFで働けていることをとても嬉しく思っています。

外国の、特に日本の友達が沢山できることや、ここにいる子どもたちが好きだからです。CFFで、一つの家族となれたことがとても嬉しいのです。

一方、故郷で暮らしている僕の家族…母親、兄、姉を恋しく思う時があります。

時々、故郷が恋しくてたまらなくなり、帰りたいという衝動に駆られて苦しくなります。母親や兄も、僕に仕事を辞めて故郷に帰って一緒に暮らそうというのです。

でも、故郷に帰るという決心はなかなかつきません。だって、僕はお父さん（安部）と、ここにいる子どもたちやCFFの人たち、そして、日本にいる友達（出会ったキャンパー達）のことが大好きだからです。

特に子どもたちはいつも幸せそうで、自分もそんな子どもたちといると、幸せな気持ちになります。こんなみんなの存在が、僕の、”田舎に帰りたい”という気持ちを忘れさせてくれます。

神様や、日本のみなさんが、CFFマレーシアのこども達の新しいバンを買うために、長い間一生懸命寄付金を集めてくれていることに、心から感謝しています。

日本のみなさん、子どもたちのために、一緒に頑張ってください、本当にどうもありがとうございます。

みなさんの想いに心から感謝して



ジンガはコンポスの取り扱い責任者

ともに生きてるよろこび

NPO法人CFFジャパン 渡辺正幸

寄付キャンペーン、目標を達成することができました。

終了まであと数日のところで、達成まであと数十万円の残りがあり、正直なところ「これはむずかしい、」と一瞬頭をよぎったこともありましたが、なんと無事に終了することができました。奇跡のようです。

「多くのみんなが協力して、少しずつでもシェアすれば、むずかしいようなことでも実現できてしまう。」こんなとてもシンプルな事実を、僕たちは、時に忘れてしまったり、「そんなわけない」って心の中で無意識のうちに疑ってしまうものですが、でもこうしてもう一度それを証明することができたみたいです。すごい。



ホント、今回いったい何人の人がこの活動のために力を合わせたんだろう。

寄付くださった人、それを呼びかけた人、メールの文章を考えた人、住所を整理した人、いろんな知恵を出した人・・・それぞれに自分ができることをやりました。

何回も声をかけられて苦しい思いをした人もいたかな？

寄付したくても、どうしてもできなかった人もいるかもしれません。

でも、そこにあった難しさや心の葛藤をも、このお金で買える「通学バス」にしたためたいと思います。

たくさんの人が出しあったこの160万円余り。それは「通学バス」を買うための160万円というひと塊になりましたが、このお金を出して下さった一人ひとりが、一生けんめい働いたり、節約したり、貯金して、苦心しながらなんとか創ったお金なんだと思います。

160万円、ポンって出していただいて買うバスもいいですが、たくさんの想いや努力、むずかしさや葛藤、そんな丸ごとが詰まったこの「通学バス」。
それが、子どもたちにとってどれほどの価値になるものか、どれほど彼らを力づけるものか、僕には想像できる気がします。

実はこのキャンペーンの終盤の期間、僕の父親が神経の病気で突然に入院し、とても難しい手術を受けていました。僕は、いろんな仕事や活動を放ったらかしにして、ずっと父親と時間をともにしていました。事情あって15年ぶりに両親と暮らし始めた矢先のことです。

介助のために握った父の手は、僕が小さい頃に握った以来の手。

症状の悪化や失明、全身不随、そして死・・・、手術前に医師から術後のたくさんの可能性を説明され、普段は無口で無愛想な父親ですが、術前はやっぱり不安そうでした。手術中の時間は、僕らの想定よりずっと長く、待たされる方はどうなったことかと本当に心配で、不安な自分をなだめながら時を過ごしていました。

そして、ついに手術が終わると、父は、呼吸器や各種点滴、その他いろいろを取り付けられ、ベッドに横たわったまま、手術室から運ばれてきました。
先生によると、無事終了、まずは問題ないとのことでした。

父は、麻酔で意識が朦朧とする中、一言「ありがとうね、みんなのおかげです」。それから何回もその言葉だけを繰り返していました。目から涙がこぼれているように見えました。動けずボロボロの姿ではありましたが、生きる歓びというか、支えてくれるすべての人への感謝というか、そういうもので包まれているように見えました。これまで見たことがないようなよろこびで輝いているように見えました。
そして僕も、今まで生きてきてそう何回も感じたことがないようなうれしさ、というか、感謝と安堵で満たされ、しばらくの間、涙がこぼれてくる不思議な感覚でした。

本当に、「生きる」とか「一緒に生きる」ってこういうことなんだなって思います。
生きるってすばらしい。

日々、与え続けていただいている僕らのいのちは、周りのすべてのいのちとつながり、
支え合ってる。同じように苦しみを感じることができるし、同じように幸せや喜びを
感じることができる。

今回の寄付キャンペーン、僕たちはきっと“一緒に生きたんだ”と思います。

直接活動にかかわったみんなや寄付やメッセージを送ってくれたみんなと、子どもたちやCFFへの想いを分かち合って、一緒に悩んだり、不安になったり。そして、寄付キャンペーンのエンディングイベントでは、パソコン画面の向こうにいたマレーシアの子どもたちやスタッフたちとも目標達成の喜びを分かち合いました。あの時のみんなでの歓喜は一生忘れられません。それはきっと「ともに生きてるよろこび」だったんだと思います。

「ありがとうね、みんなのおかげです」。

父の言葉が、CFFにつながるみんなの姿と重なって、あらためて僕の心の中に染み入ります。



寄付キャンペーン2012 エンディング イベント 2012/7/15

トゥリマカ通信報告号！バスが子どもの家にやってきました！

マレーシア応援団青年ボランティア 木村万里子

通学バスがマレーシア子どもの家にやってきました！！



みんな喜んでバスに乗って通学しています！

~~~~~

みなさんこんにちは。

マレーシア第4回キャンプに参加したキムこと、木村万里子と申します。

いつもトゥリマカ通信を読んでいただきありがとうございます。

6月16日から開催された寄付キャンペーンも無事に終わり、この一ヶ月間で約250人の方から1,966,962円ものご寄付をいただきました。

応援団を代表しまして心より感謝申し上げます。

私が初めてマレーシアの地を訪れたのは2008年。

CFFマレーシアが事業を始めた最初の年でした。





子どもたちのいない土地。バンブーハウスと1回から3回のキャンプで築いたもの以外は何もなかったあの場所。

「見えない何か」に向かってがむしゃらにワークをしたのを覚えています。

その後私の中のレーシアの土地は、あの時のまま時間が止まっていました。

応援団に入り子どもたちの入所を目指して活動していた時も、

実際に子どもたちが入所してきた時も、

なんとなく実感がわかなくて、私は相変わらず「見えない何か」に向かって活動していました。

2008年のときのまま、私は止まっていました。

でも、今年の寄付キャンペーンは私の止まっていた時間を動かしてくれました。

マレーシア応援団を支えてくださっている仙川キリスト教会という教会があります。その教会の日曜日の礼拝に応援団のメンバーで訪れ、寄付キャンペーンの説明をさせていただきました。

「なぜ、私たちがこの活動をしているのか」

そんな想いをシェアする時間があって、応援団の男の子二人が想いを語ってくれました。

二人とも熱い想いが溢れて、泣きながら想いを語りました。

そして、教会の方々もそれを涙を浮かべながら一生懸命聞いてくれました。

「みんなで支えてる」って実感が、どこからか湧いてきました。  
こんなにも多くの方がマレーシアの子どもたちに想いを馳せてくれていて、  
遠い地で、会ったことはない子どもたちのことを愛してくれている。  
こんなにも多くの人に愛される子どもたちのことを、とても愛おしいと思いました。

私も会ったことはないけれど、確かにマレーシアのあの土地で生活を始めた子どもたちのために、今頑張っている。

私達は子ども達の未来を創るために力を注いでいる、そう確信できました。



一人ではできないことをみんなでやったらできた。  
とてもシンプルなことですが今回の寄付キャンペーンでそれを強く感じました。  
応援団のメンバー、寄付を下さった方々、支えてくれている方々、メッセージをくれた方々、みんながいなければ今回の結果には結びつきませんでした。

子ども達が、みなさんの想いの詰まった通学バスで学校に通い、未来を思い描き、そして夢に向かって歩いて行くことを、私は願っています。

寄付キャンペーンにご協力いただいたみなさん、本当にありがとうございました。  
本当に本当に、みなさんの力が子どもたちの未来を作っています。

みなさんの想いに感謝します。  
トゥリマカシー（ありがとう）。